

# 臨床のきれはし

Sheet20

浅田 英輔

## DUALISM

少し前に、JAXA のロケット「H3」の打ち上げに関して、「失敗」という言葉を言い捨てた記者が炎上していた。打ち上げ途中でやめたのだから「中止だ」という声が大きく、打ち上げをしていないのだから失敗ではないだろう、事前の中止だ、という言い方であった。動画を見てみると、失敗か中止もそうだが、言い捨てる感じがとても印象が悪かった。

炎上すると様々な意見が出てくるのだが、その中には「失敗でいいじゃないか」「失敗というものはそれほどまでに【悪いこと】なのだろうか」といったものもあった。

「【成功】じゃなければ【失敗】でもいいのでは？」といったものもある。

実際に携わった方からすれば、そんな言葉なんてどうでもよくて、「今回できなかったから次やるだけだ。失敗か中止かはどうでもよい」という気はする（完全な推測）。もちろん、記録をどう書くかとか、オカネをどうするかとかそういう問題はあるだろうけれど。

成功か失敗かどちらなのかが、それほど重要なことであろうか。

世の中、二元論に囚われすぎていないだろうか？

ロケットは失敗したのか中止なのか。子育ては成功か失敗か。大学にいくかいかないか。マスクはいるかいないか。ワクチンは必要か不要か。コロナ対策はよかったのかわかったのか。ロシアが悪いのかウクライナが悪いのか。いじめたほうが悪いのか、いじめられたほうが悪いのか。不登校はよいのかわるいのか。うつの人に

「がんばれ」といいのかわるいのか。現政権はよいのかわるいのか。これらは、一元的にわかるものであろうか。

子育ての成功失敗はどこでわかるだろうか。いい大学に入ったら成功？よい企業に就職したら成功？生涯罪を犯さなかったら成功？よくわからない。でも「成功する子育て」といった本が売れたりする。その場で適切なかわりはあるかもしれないが、それをやったら成功するのか？

子どもにかかわる際の助言として「ほめるようにしましょう」というものがある。こういって、「叱っちゃだめなのか」という質問を受けることもある。「なんでもかんでもほめなければならぬのか」といった指摘をされることもある。そんなわけないのだ。「ほめる主体のかかわり」＝「叱らない」でもないし、「何もかも許す」でもない。ましてや、「叱ることは悪」でもない。

不登校の子に、登校刺激をするのはよいのかわるいのか。うつの人にがんばれと言ってよいのかわるいのか。正しい答えを求めたい気持ちはとてもわかるが、答えとしては、「一般的によくないとされるが、場面によってケースバイケース」である。

対人援助についても同様である。例えば、リストカットについては、そりやらないほうがいいに決まっているが、「やめなさい」といってもやめられるものではない。治療の経過でリストカットはなくなったが、例えば過食が

ひどくなった、ということも起こるだろう。その場合は「成功」なのか。「主訴がリストカットなので、成功だ」ということもできるだろう。でも、そのクライアントの大変さが変わっていないのであれば、「失敗」ということもできるだろう。リストカットをやめられる薬（そんなものはないが）を飲んでやめられたら成功なのだろうか？リストカットが続いていると「失敗」なのだろうか。本当にうまくいったかどうかは、かなり長い年月を経なければわからないのではない。短期的な「成功だ」「失敗だ」ということ自体が意味のないことなのではないだろうか。

役所の仕事でも、短期的な結果を求められることが多い。自殺対策にしたって、「去年がんばって対策したから今年の自殺者が少ない」ってことはあるだろうか？平成半ばの3万人越えに対する長年の取り組みの結果として、いま2万人と少しになっているといえるのではないだろうか。青森県は自殺率が高いが、ある年だけ「ワースト1を抜けだした、よかった」なんて言う意味はあまりない。

なんだか、「正しさ」を求める世の中である。何が正しいか正しくないかなんて、そんなにわかるものではないはずなのだが、皆がそればかりを求めているように思う。強い言葉であるほど「正しくない面」も含んでしまうため、はっきりした言い方がしにくくなっている。少し前に話題になった「保育園落ちた日本しね」もそうだ。たしかに「日本しね」なんて言葉はよくない。でも本質はそこではないなんてこと、みんな知ってるでしょう？

何にだっていい面と悪い面がある。100パーセント完全な善などない。そんなことみんなわかっているのに。

ネットにも「ある人がこれこれこういうことをするのは正しいと思いますか？」みたいな質問が出ていたりする。しらんがな。場合と関係性によるわ。としか言えない。

正しいことばかりを追い求めていくと、そこに生まれるのは分断である。「あちら正しい人、こちら正しくない人」と分けられてしまうのだ。正しさなんて人の数ほどあ

るわけで、それを「そんなもんだよな」と内包していくのが健康的な社会ではないかと思う。わかりやすいのが心理業界の分断ではないだろうか。臨床心理士資格も公認心理師資格も、どちらもどっちな感じの不完全さである（完全な資格などあるだろうか、いや、ない）。譲れない部分をもつことも大事だが、大所高所で構える必要のある資格団体などは、「いろいろあるけど、みんなやっていこうぜ」くらいの鷹揚さが必要なのではないだろうか。

世の中に分断を作り出すことは、あまりいい結果を生まない。現在の様々な支援制度も似たところがある。「はいアナタ身体障害ですね、コチラです」「ああ、精神障害はこっちです」「65歳過ぎた方はみんなこちらになります」と、別々の箱にいれて、まさに「分断」している。「不登校はこちらです、学校を卒業する年齢になったらひきこもりのコースになります」みたいな。

診断名などの「名前をつけること」は、援助をやりやすくする意味がある。AD/HDの人にはこういった対応が有効ですよ、とか、この薬が効き目ありますよ、とかだ（人によってかなり違うが）。身体医療の分野では特にわかりやすい。そのために診断名がある。でも、診断名を付けるのは分断するためではないはずだ。「学校には未診断の発達障害の子がたくさんいる」という話もあるが、だからなんなのだ。「だから分断しなければならぬ」とも聞こえてしまう。発達障害であろうがなかろうが、その子にあった対応をすればよいだけである。今の学校にその余力があるとは思えないが、発達障害も含めて、一人ひとりの生徒にほどよく適切な対応ができたなら、世の中は今よりずいぶん平和になるのではないだろうかと思う。

自分の中の芯としての「ただしさ」を持っていることは大事だが、それが絶対に正しいものではないという認識と、違いを許容できる寛容さも持っていたい。